The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	メディアのなかの性風俗 : 週刊誌『アサヒ芸能』を手がかりにして
Author(s)	景山, 佳代子
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45729
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【1】

氏　　名	景　山　佳代子（かげやま　かよこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学　位　記　番　号	第　19014　号
学位授与年月日	平成16年9月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科社会学専攻
学　位　論　文　名	**メディアのなかの性風俗：週刊誌『アサヒ芸能』を手がかりにして**
論文審査委員	（主査） 教　授　厚東　洋輔 （副査） 教　授　牟田　和恵　　教　授　川端　　亮

論文内容の要旨

メディア研究は転機に直面している。センセーショナルで商業主義的なジャーナリズムのあり方は、従来のジャーナリズム研究では否定的に評価され、学問的考察の周縁部に押しやられてきた。しかし近年になって、「三面記事」を中心に据えたメディアを英米ではタブロイド・ジャーナリズムと呼び、こうしたジャーナリズムのあり方からジャーナリズムに関する「正統的な」概念を問い直そうとする機運が高まってきている。本論文もまたこのような研究と流れを同じくするものである。

本論文は週刊誌に関する社会学的分析である。週刊誌のコンテンツのなかで特に考察の中心に据えられているのは「性」である。というのはセックスというテーマは、タブロイド・ジャーナリズム研究にあっても私的で非政治的なものとして位置づけられ、それゆえ学問的周縁に追いやられる傾向が見られるからである。また、従来の雑誌分析では、若者向けの雑誌、および女性を読者とする雑誌が主として取り上げられ、中年男性向けの雑誌は無視される傾向があった。本論文で考察の対象として選ばれたのは、このような二重の周縁性をもったジャーナリズムである『アサヒ芸能』である。

週刊誌ジャーナリズムとセックスと中年男性。『アサヒ芸能』はこれらの項をつなぐメディアの一つの典型となりうる。『アサヒ芸能』をとりあげることで、これらの項の関係性を問い直していくのが、本論文の課題であるが、本論文のもう一つの特徴は、雑誌分析の手法として、コンピュータ・プログラムを積極的に用いていくところにある。コンピュータを利用した質的データの分析方法の発展は、近年めざましいものがあるが、本論文では、従来のテクストを緻密に読んで解釈するという方法に加えて、計量的技法によって全体的トレンドを数量的指標でもって明らかにするという方法が用いられている。これによって質的分析と量的分析の統合が志向されている。

本論文は5つの章より構成されている。

第一章では、週刊誌『アサヒ芸能』創刊の経緯と歴史が考察される。『週刊新潮』と『アサヒ芸能』の二誌だけであった出版社系週刊誌が、新聞社系週刊誌との競争に生き残っていくために、いわゆる「週刊誌ジャーナリズム」のやり方が確立されていく。芸能新聞であった『アサヒ芸能』が、性風俗というテーマを強く打ち出して販売数をのばしていった時代背景や、その狙いなどが歴史的に跡づけられる。

第二章では、具体的な分析をすすめるための方法について論じている。『アサヒ芸能』が1956年に創刊され、現在にいたるまで出版され続けている週刊誌であるということは、データの質量両面において、一貫した枠組みでの分

析を非常に困難なものにしている。そこで分析手法として、本論文では質的データのコーディングを行う、KT2 システムとよばれるコンピュータ・プログラムに注目した。大量データを一定の基準にしたがってコーディングできるプログラムは、作業の迅速化、分析の妥当性・信頼性の確保といった利点を有している。データ・コーディングの考え方と、KT2 システムの具体的な利用手順について、この章では論じていく。

第三章では、『アサヒ芸能』編集者へのインタビュー・データを分析して、メディアにおける性風俗の生成の仕組みが分析される。H・ガーフィンケルの示唆に従うなら、性風俗記事とは「性風俗について話すことであると同時に性風俗を構成する特性の一つ」だとも考えられる。『アサヒ芸能』というメディアにおける性風俗記事の分析を通して、何が性風俗として語られているかが明らかにされると同時に、ある現象が性風俗記事へと変換されていく際に果たす「作り手」の決定的役割もまた明らかにされる。性風俗を構成する技法として、異質なものの異常接近によって「想像的なもの」の創出を図る「ファンタスティックな二項式」というやり方が有効であることが、帰納的に析出された。

第四章は、1965 年から 1974 年まで続いた性風俗の長期連載シリーズをとりあげている。記事の分析から明らかにされるのは、「土地」という要素を媒介にして展開されていた性風俗の「物語」から、しだいにその物語性が失われていくありさまである。では、そもそもなぜこの時期の性風俗にとって「土地」という要素が必要であったのか。なおかつそれが失われていったのはなぜなのか。60 年代から 90 年代に至る性風俗の変化の潮流は「線から点へ」の性風俗の変容として押えられ、「線の性風俗」という物語構造を可能にした、要素・要素のつながり・社会的条件が、連載記事の緻密な解読を通して構造論的に明らかにされていく。

第五章で論じられるのは、現代の性風俗の姿についてである。そのために 1970 年から 89 年までの 20 年分の目次をデータとして、KT2 システムと、その基本的発想をうけつぎ、新たな機能を追加した KH Coder と呼ばれるコーディング・プログラムを併用する。これによって見えてくるのが、80 年代後半に入ってからの、性風俗をめぐる記述の顕著な変化である。その変化は次の二点に要約できる。一つは、見出し全体に占める性風俗関連語の割合の減少。もう一つは、性風俗を構成する性的な単語の増加。つまり性風俗それ自体への言及は減っているが、性風俗を語るための性的な言葉は増えているのである。数量的なアプローチによって浮かび上がったこの矛盾。この矛盾を解き明かすなかで、カタカナの「フーゾク」が従来の「性風俗」の自己解体の中から生まれ出るありさまが明らかにされる。

『アサヒ芸能』に見られる性風俗の変化は、単に性風俗記事における語りの変化を語り出すだけのものではない。そこに見えてくるのは、雑誌と読者の共同作業としての、性風俗という「現実」の構成であり、またその構成において決定的な意味を持つ読者のリアリティとその変容という問題であった。センセーショナルな周縁ジャーナリズムが基盤とするのは我々の日常であり、家族や夫婦、恋人、友人といった関係性が、性という問題を抜きにしては語れないものであるならば、性をめぐるリアリティの変容が、私たちが蒙りつつある日常性変容の中核を成していることが、『アサヒ芸能』という特異な雑誌の分析を通して首尾一貫した形で浮き上がってくるのである。

論文審査の結果の要旨

メディア研究の新しい潮流として、「タブロイダイゼーション」といった概念等を用いた、いわゆる「三面記事」あるいはセンセーショナリズムに関する研究のあることが、しばしば指摘されている。本論文は、「セックス」を中心に「二流に徹する」ことをもって戦後日本社会を生き抜いてきた週刊誌『アサヒ芸能』を素材に、センセーショナリズムの純粋型を分析によって摘出しようとした研究である。第二次大戦以降の 50 年にわたる歴史を視野に収め、刊行された週刊誌の記事分析に加えて、編集者へのインタビュー等によって制作者側の意図を補完的に用いつつ、ユニークな週刊誌『アサヒ芸能』の栄枯盛衰を興味深く浮き彫りにしている。

本論文のオリジナリティーとして第一に指摘すべきは、雑誌分析の常套的手法である「解釈」によるテクスト分析に加えて、「KT2 コーダー」というコンピュータを駆使した計量分析の手法を導入した点が挙げられよう。コンピュータコーディングを用いることによって、50 年にわたる膨大な量のテクストを研究対象として、追試可能な形で客観的に分析することが可能になった。

時代を代表するする性風俗として、60 年代の「パンマ」→70 年代の「地元芸者」→80 年代の「韓国エステ」、と

いう一連の流れを取り出し、その流れの基層に目を注ぐことによって、漢字の「風俗」からカタカナの「フーゾク」へ、という形で戦後日本人のセクシャリティーの変遷が、シンプルな形式で描き出すことが可能になった。さらにまたアトラクティブな「性風俗」を作り上げるメディア上の技法として、異質な二つの要素を異常接近させることによって人々の想像力を刺激する共通の方式を抽出し、それをイタリアの著作者ロダーリに倣い「ファンタジーの二項式」として定式化した（例示。あんま＋パンパン→パンマ）。

本論文は、これまで学問的に問題にされもしなかった『アサヒ芸能』を取り上げ、「三面記事」の本質を「想像的なものと現実的なものとの相互越境化」という形で理論的に規定し、雑誌分析に新しい境地を切り開いた。以上、問題設定の的確さ、素材の新しさ、分析の着実性、オリジナリティーあふれる分析結果等々を勘案して、博士（人間科学）に十分に値するものと判定した。